

火葬場のバースデーケーキ

墓地に入ると手前から四つ墓石が並ぶ。その収まりようは缶詰のイワシのようにすし詰めになっけていて居心地が悪い。隆起した地面になんとか均衡を保っている墓石はガタガタの歯列のようだし、その汚れは磨かれずに放置された虫歯みたいだった。その中で真ん中で輝く一つの墓石は歯で例えるならばそう、隙間に無理やり埋め込まれた入れ歯だろう。

その前に俺は立っていた。死者に囲まれた空間にたった一人生きていることはなんとも表し難い気持ち悪さだった。

香花を手向けてぎこちなく手を合わせる。自分がそうして良いのかもわからない。一年に一回ここに足を運ぶのはもはや義務だった。手を崩し、一息吐く。木漏れ日が反射し、やけに輝く墓石は、生きている俺より生気があるように感じられて居心地が悪い。重たい腰を上げようとしたその瞬間、声が出た。

「これ、全部墓じまいされずに残った墓なん
だつて」

「え？」

後ろを振り向くとシワの寄ったダサイ黒の
スーツにパサパサの髪を茶色に染めた可奈子^{かなこ}
さんが立っていた。

「なんかさ、ある程度年月が経って、お墓参
りに行く人がいなくなったら取り壊すらしい
よ。なんか色々許可とって」

砂利を傾斜の急なピンヒールで踏みつけな
がら横にしゃがみ込む。

「だから私、他のみたいにこの墓も残してお
けるように、あと二百年は生きるつもり」

「だいぶ馬鹿げてますね」

「あんたも巻き添いだよ」

俺は墓石の隙から這い出してきた新たな芽
に目を落とした。

それは俺を絶対に死なせない、ということ
だろうか。

柄杓に注いだ水を可奈子さんが上から墓石に掛ける。あまりの勢いに俺がせつかく手向けた線香はプスツと小さな音を立てて消えた。まただ。彼女はいつも俺の線香を消す。

「象の水浴びじゃないんですから」

俺は新たな線香を取るために立ち上がりながら言う。

「諒さん、優しいから何も言えないですよ」

「いいじゃん、どうせ死んでるんだし」

柄杓を振り回しながら可奈子さんが言う。

「大体、生きてるときも何か言えるような根性してなかったよ」

可奈子さんは不謹慎だ。俺はこんなにも不謹慎な人に出会ったことがない。

線香に火を点けようとガスライターに力を込める。カチツと音がするが点かない。もう一度押してみてもかすつたような感触だけが手に残る。どうやら切れたみたいだ。俺が手こずっているのに気付いたのか可奈子さんがピンヒールをジャリジャリ言わせながらこち

らに向かつてきた。

「なに？切れたの？」

「多分」

彼女は溜息を吐いて乱雑にスーツのポケットを漁った。

「ん」

ポイツと投げられたのはプラスチックの安いライター。俺は礼の代わりに頭を軽く振って線香に火を点けた。想像以上の火力に驚く俺のガスライターはちよつとしか火柱が上ら

なかつたのに。

「タバコ、吸うようになったんですか」

線香を差し、ライターを手渡しながら聞く。

「いや」

可奈子さんはポケットからタバコの箱を出して、一本取り出した。

「十六から吸ってる」

いる？と聞かれたのに今度はちゃんと口に出して断る。タバコの灰がぼろぼろと溢れた。その灰がふとあの日のことを思い出させる。

いや、もちろん忘れられるわけはないんだけど。

木漏れ日が姿を消し、急に肌寒くなる。線香の煙が揺れた。あの日の煙はもつと凄まじいものだつた。

ハツと我に帰ると可奈子さんの顰め面がこちらに向けられていることに気付く。

「なに思い出してんの」

俺は咄嗟に目を逸らして俯いた。彼女は俺の反応にほくそ笑んだ。不謹慎な人だ。俺が何を思い出しているのか、解りきつていらずなのに。

「そういえばさ」

帰ろうと学校の指定鞆を肩に掛けたところで呼び止められる。

「あんた、今日で幾つになつたんだっけ？」
毎年聞かれる質問。いい加減覚えてくれてもいい気がする。が、きつと俺にはそれ程の価値が無い。

「十八です」

「うわーそっかあ。あの日から十年経ったんだもんなあ。そりゃ私も二十八だよなー」

可奈子さんはパサパサの茶髪を靡かせて立ち止まった俺の側を通り過ぎた。そして振り返り向いた。

「えてことは二年後には成人?!」

俺は溜息を吐いた。

「成人は十八歳に引き下げられたんですよ、可奈子さん」

「は？今年から？」

「一昨年からです」

可奈子さんは嘘だと言いながら頭に手を当てて唸った。

「えじゃあ、あんたはもう大人なの？」

「まあそういうことになりますね」

「はあ？何それ聞いてないんだけど」

俺は肩をすくめた。怒られる筋合いはない。柔らかな秋風が頬を撫でた。可奈子さんは煩わしそうに頭を掻き筆った。

「成人、祝ってやろうか？」
それは殆ど命令だった。

人生で初めて誕生日を祝ってもらったのは
児童養護施設に連れてこられた年だった。八
歳を迎えた俺は初めての友達、初めての誕生
日会に、興奮が止まらず、久しぶりに心から
笑っていた。そんな俺を嘲笑うかのように事
件は起きた。

八本の大きな蝋燭が刺さったケーキから目
を離したその瞬間、誰かが机にぶつかり、ケ
ーキは地面に滑り落ちていった。ボツと火の
音がした。木の燃える臭いがして世界が真っ
赤に染まる。そこからは記憶が確かじゃない。
ただ誰かの泣き叫ぶ声が今でも耳の奥にこび
りついていて、俺を離してくれない。
気付けば火の海に吞まれていた俺は息がで
きなくなりそのままその場に倒れた。目先の
視界が霞む。ここで死ぬんだ、と思った。誕
生日に死ぬなんて。なんとも不謹慎な話だ。

熱い空気が肌を焼く。骨になるまでそう時間にはかからない気がした。ふとついこの間見た火葬場を思い出す。ここで俺は火葬されるのか。そう思った。虚ろな視界の端にぐちゃぐちゃに潰れたケーキが映る。一口ぐらい口にしてみたかったものだ。目の前が暗くなるとき、誰かが俺を呼ぶ声があった。

「おい」

俺はハッと我に返った。

目の前に置かれたお冷が薄っすらと汗をかいている。反射的に手にとってテーブルに水が溜まっていることに驚く。それほどボーツとしていたのだろうか。

紙ナプキンを取り、溜まった水を拭いていると可奈子さんが溜息を吐いた。

「あんたボーツとしすぎ。何頼むか聞いてんだけど」

「ああ、えつと：」

「もういいよ。私が勝手に頼むから。」

慌てて手に取ったメニュー表を奪われる。正直助かった。どれだけ長時間睨めっこしても食べたいものが出てくる気はしない。ふうと息を吐いてやたらと垂直で居心地の悪いファミレスの椅子に背を預ける。居心地が悪いのは席の所為ではないだろうけど。窓の外の赤に染まった木の葉に目を向ける。俺はなんでこの人といえるのだろう。一年に一度会うだけでもかなり苦痛なのにどうしてか今日はファミレスにまで来てしまった。

注文するものを決めたのか備え付けの電子機器に入力し始めた可奈子さんを盗み見る。俺がどんどん成長していくのに対し、この人はずっと変わらず、あの頃のまままだ。それが余計に俺を苦しめる。

「なに？またブーツとして」

社会人にしては伸び過ぎた爪で注文確認ボタンを押しながら可奈子さんが言う。

「すみません」

「思っていないなら言うな」

「…はい」

器械から鳴る軽やかで明るい音は俺たちにはあまりにも不釣り合いだ。

それつきり会話は無く、可奈子さんはガチャガチャと音を立てながらメイクポーチを漁っては手鏡と向き合っている。ボーツとすると怒られてしまう俺は、所在なくスマホに目を落とし時間を見つめていた。落ち着かず周囲を眺めるも、店内は騒々しく、俺たちの料理が届く様子もない。

十分、十五分、二十分。可奈子さんのメイクが濃くなっていくとともに俺は空気の重さに耐えられなくなっていく。

「あつ…」

店員がきたのと可奈子さんがメイクを終えたのと俺が立ち上がったのは殆ど同じタイミングだった。

結局また座ることになってしまった俺は差し出されたケーキに手をつけることができず

にただ見つめていた。目線を感じてそつと交
合わせるとあからさまに睨みつけられる。

「食venaよ。奢るから」

「食べれると思います？この状況で」

俺が言うのと可奈子さんは手に握っていたス
マホをバンツと机に叩きつけるようにして置
いた。

「何がそんなに気に入らないわけ？」

置かれたスマホからゆっくりと目線を上げ、
負けじと睨み返す。

「わかってますよね」

その瞬間可奈子さんから不謹慎な言葉が飛
び出し、俺は頭が真っ白になった。

「自分が殺しちやつた男の彼女の前だから気
まずいつてこと？」

俺は勢いよく立ち上がった。

「帰ります」

「帰んな」

「いいえ、帰ります」

鞆を掴み、席を離れようとすると思いつきり引つ張られ後ろから席に倒れ込む。

反抗しようとしてキツと顔を上げると過去にも類を見ない程恐ろしい顔をした可奈子さんが俺を睨みつける。

「帰んなって」

先程より随分と力強くなった目力はメイクの所為だと思いたい。

「あんたに拒否できる権利なんかないよ」

そう言つて鞆ごと引つ張り上げられる。

「大体ホントの意味で帰る場所なんかないだろ。家族もいないくせに」

本当に、なんて不謹慎な人なんだろう。

「どう？」

「…はい」

「嘘でも美味しいって言えよ」

秋の味覚が綺麗に彩られたケーキは鉛の味がした。正直吐きそうだが必死に喉の奥に押

し込む。

俺と違い、珈琲を流し込む可奈子さんは余裕そうな表情まで浮かべていて、なんとも言い難い気持ちになる。俺がこの人に勝つことは今までも、そしてこれからもない。

「あんたはさ」

可奈子さんがカタツとコップを机に置いた。「すごい勘違いしてるよ」

外の木々が激しく揺れる。

俺は鉛の塊を無理やり飲み込んだ。

「私、諒ちゃんのこと、全然好きなんかじゃなかったんだから」

俺を見つめる可奈子さんの目は、俺を見ていないみたいだった。

「高校生のときってさ彼氏いる奴のほうが一軍、みたいな風習あるじゃん。それで付き合ったの。諒ちゃんと」

珈琲の湯気がゆつくりと渦巻く。

「そう言えばまだいい感じに聞こえるかも。」

ホントは諒ちゃんが私のこと好きだつて噂があつたから利用しただけ。顔も悪くなかつたし？身長もあつたし？」

そう言つて可奈子さんは鼻で笑つた。

「一軍の子たちと仲良くしてたかつたの。自分の価値を上げようつて必死だつた」

俺はただ黙つて可奈子さんを見つめていた。「告白してみたらずごい喜んでくれて。両思いだとは思わなかつたつて。あんたは知らないだらうけど全然カッコよくなくて。抜けて

るし、男気はないし、自分の意思すらなかつた。デートも私の好きなところでいいつて言うし、財布忘れて結局私が払うことになるし、こつちばつか見てるから街中でつまずいてこけたりして。最悪だつたの。なんでこんな奴と付き合つちやつたんだろうつてイライラしてた。ホントに嫌いだつた」

窓の外の空はピンクと赤が混じり始めている。そつと外を見て可奈子さんは諦めたような笑みを浮かべた。

「そんなときだった。あそこの施設が燃えたの」

俺は目を逸らして俯いた。可奈子さんの声が俺の鼓膜を揺らす。

「学校帰りにいつも通る道で、なんかいつもより人多くて。なんだろうと思ったら煙が上がつてて火の粉が道まで飛んできてた。それで聞こえたんだよね。『男の子が中に取り残されてる!』って誰かが叫んでるの。平和でつまんないぐらい何にも起きない街でそんな

ことあるんだって。目の前で起きてることなのに、すごい他人事だった。」

そう言つてまた可奈子さんは笑った。

「ここにいても何もできることはないし、帰ろうつて言うつもりだった、諒ちゃんに。でも振り向いたらそこにいなくて。背中声が上がりつて嫌な予感がした」

やけにうるさい店内が急に静かになったよ
うな気がして、俺は顔を上げた。

「火に諒ちゃんが飛び込んでつたの」

あまりに不謹慎に笑顔を浮かべるその人が、初めて無理をしているように見えた。

「そのとき思わず叫んだよね、諒ちゃんってあの人の名前を」

今までほとんど呼んだことなかったんだけど、と可奈子さんが小さく呟く。

「相当必死に見えてたと思うよ？叫びながら火の中に追いかけていこうとして止められたりしてね。消防車も救急車も来るからって。きつと大丈夫だよって適当に慰められて」

でも、と言葉が続く。

「何も大丈夫じゃなかった」

俺は拳を握りしめた。その拳には白い斑点が薄く残っている。火の中に取り残された俺は火傷を全身に負ったが、顔だけ無事だった。俺の元に飛び込んできた諒さんが、咄嗟に自分の上着を俺の顔に被せ、煙を吸わせないようにしたからだ。治療には随分と時間を要したが、俺は生きていた。諒さんの命と引き換えに。

暫く沈黙が続いた。ファミレスのやけに軽い空気が俺たちの間に流れる空気をさらに重くする。俺は果たしてこの人に何を言うことができるだろうか。その瞬間可奈子さんが口を開いた。

「でも諒ちゃんがあんたと一緒に火と灰の中から救出されたとき、初めて思ったの」
どこからともなく風が吹いた気がした。

「この人が好きだな、って」
本当に、なんて不謹慎なんだろう。

「不謹慎でしょ？でも考えてみてよ。知らない、会ったこともない、可哀想な施設の子のために、自分の命投げ出せるんだよ？」

ヒーロー映画でしか見たことないよね、と可奈子さんが呟く。

「私、ホントに泣いたし、ずっと生き返ってくれないかって、もう一回だけ、今度はちゃんとこの人と向き合うからって、何度も願ったよ」

夕焼けと同じ色に染まった紅葉を見つめる

可奈子さんは、本当に泣いているみたいだった。

「失って初めて気付くってこういうことを言うんだらうね」

俺は俯いた。そしてそつと白く残った跡を指で擦った。

可奈子さんは驚くほど不謹慎だ。でも彼女をこうさせてしまったのは俺だらうし、彼女の苦しみを長引かせているのも俺だらう。この人は、俺の顔を見るたび、白く残った跡を見るたび、諒さんを思い出す。自分がしたことへの強い後悔と、彼への執着心を全て背負って生きて行かなければならない。

病院のベッドで、火の中で意識を失うときに聞こえた声がして目を開けたら、それは可奈子さんの声だった。彼女は何故俺の名前を知っているのだらうとぼんやりとした頭で思っただと気付いたとき、やはり生きていくべきではなかったと思つた。大切に想ってくれてい

る人などいない俺は、生きている必要がない。彼は、こんな想像で泣いてくれる人がいるのに、何故俺を助けてしまったのだろう。そんな考えが俺の頭の中を渦巻くたび、生きていて嬉しいと泣くことも、何故生きているのかと怒ることも、生きていてごめんなさいと謝ることも。何ひとつできなかつた。

俺は頭を下げた。

「ごめんなさい」

何度も、

「ごめんなさい」

何度も。

「ごめんなさい」

「ねえちよつと…！」

「ごめんなさい」

「やめてつて…！」

何度も何度も…。

「ごめんなさい…」

「亮！」

俺はハツとして息を呑んだ。あの時の声で、

初めて自分の名前が呼ばれた。握りしめた拳に水滴が落ちて白い跡に浸みる。俺は泣いていた。

「謝ってほしいんじゃないって」

「ごめんなさい、でも、俺っ……」

諒さんを死なせてしまった。その重すぎる罪が心を蝕んでいく。諒さんの命と俺の命じや釣り合わない。あるときあのまま燃え尽きてしまったらどれほどよかったか。そうすればこんなにも可奈子さんを苦しめることもなかったのに。

可奈子さんにとつたら俺は恋人の代わりに死んでほしかった人で。俺はただ、奇跡的に死刑を免れて終身刑になっただけの殺人犯でしかない。こんな罪を背負って生きるぐらいなら死んでしまいたいのに、諒さんからもらった命を捨ててはいけない。俺は何が何でも、生き続けなければいけない。諒さんのために……。

不意に甘くて柔らかい香りが頬に押し付けられた。淡い色のハンカチだった。

「泣くな」

「：ごめんなさい、泣きたいのは：」

「違う。私は泣かない。泣いてない」

「俺のせいで：」

溜息が聞こえて乱雑に可奈子さんが俺の頬をハンカチで拭った。

「よく考えてみてよ。私が諒ちゃんのことをちゃんと好きになれたのだから、あんなのおかげなんだよ？だから簡単に言えばあんなは恋のキューピッドなの。わかる？」

そう言つてふわりと笑う。

「私、こういう性格だからさ。すぐにちゃんと伝えたかったんだけど」

なかなか上手くないもんだねと可奈子さんが俯く。

「あんなのせいじゃない。何も背負う必要ないし、私に気遣う必要も無いよ。諒ちゃんが勝手に自分の命をあなたに渡したんだからさ、むしろ悪いのは諒ちゃん。その命をどう使うかはあんな次第なんだよ。どう使っても怒

んないと思うし、諒ちゃんだから。あんたが私が嫌なことばかり言うから気にしてるんだつたら申し訳ないけど、いい加減私はこんな奴なんだって理解しろ。私はむしろさ、あんたが助かって良かったと思ってるんだから可奈子さんはゆつくりと顔を上げて微笑んだ。

「つまりさ、亮は亮のまま生きていけばいいんだよ」
夕焼けはもう夜を始めようとしているみたいだった。俺はそこでやつと、息ができるようになつた。

秋という季節は気付かぬ間にやってくるみたいだ。外の心地の良い寒さに身震いする。

「おい亮！何をポーつと突つ立ってんの。行くよ！」

「あつはい」

少し先で手招く可奈子さんに駆け寄る。

あれから俺たちの間で大した話はなかった。

可奈子さんが前の会社をクビになって現在就
活中で忙しくて大変だの、冬になったら誕生
日がくるので某有名ブランドのバッグをケー
キのお返しにプレゼントしろだのとそれぐら
いの会話だ。

「そうだ、車の免許とか取ったらどつか連れ
て行ってよ。就職祝いにさ」

「嫌ですよ。大体就職できるかも分かんない
のに変な約束取り付けなくてください」

「失礼な子だね。言つとくけど内定は毎回ち
やんともらってるから！」

「続けれなきや意味はないです」

うるさい！と大声で叫ぶ可奈子さんは酔っ
ているみたいで面倒くさい。お酒なんて一口
も口にしていないはずなのに。

「卒業したら施設出るの？」

可奈子さんの質問にはいと頷く。

「そっか。まあなんかあつたら頼りな」

「無職の人になんか頼れないです。俺の方が
先に就職先決まる可能性高いですよ」

「そしたら私が頼る」

「やめてください」

可奈子さんのやけに響く軽い笑い声が夜の街を賑やかにする。俺もそつと微笑んだ。大股でどんどん先に行く可奈子さんの後ろをゆつくりと追いかける。少し肌寒い風が俺たちの間を通り抜けていった。

ふと線香のような煙の匂いが鼻に触れて横を見ると、つい最近できたばかりの葬式場からだった。心の中でそつと手を合わせて通り

過ぎようとする可奈子さんが振り向いた。

「なんかバースデーケーキみたいな匂いする
本当に、彼女は不謹慎だ。」